

わ わ

環と和

環境と人間の関わりを
自分事として考える
デジタルマガジン



「環境と人間」を問う意味

わたしたち人類がすべてこの世界から消え去ってしまったとしたら、はたして「世界」は存在していると言えるのか…

人類なんていなくても、「世界」は存在しているに決まっている。だって人類が生まれる前から、「世界」はあるのだから！

意気揚々とそう答える人もいるでしょう。その意見は、人間の思弁に重きを置いて「世界」を捉えてきた歴史を見直すのに役に立ちましょう。でも少し思い出してほしいのです。

2020年の春に新型コロナ感染が拡大し、外出禁止となって街の様子を…。

街から騒音や匂い、明かりも消えたあの時を…。

そこには「世界」は確かにあるはずなのに、あたかも無いかのようでした。私たちは「世界」を、私たちとの「関わり」のなかで意識しています。そうした私たちを取り巻く世界を「環境」と呼びます。

わたしたち人類がいなくなっても、また別の環境が存在することでしょう。しかし夏のクチナシや秋の金木犀のえもいわれぬ香りに胸を焦がし、早朝に澄んだ声でさえずるキビタキを愛でる存在は、はたしてそこにはいるのでしょうか。

わたしたち人類は、わたしたちを取り巻く環境とどのように関わっていくのでしょうか。もちろんその環境には上記のような自然環境もありますが、情報環境のような人工的な環境もあります。情報環境もわたしたちの生存に大きく関与し、持続可能社会を構想していくのに際して、その在り方が大きく問われています。自然環境にせよ、人為的な環境にせよ、わたしたちは、常に自覚的に「関わり」を問うことが求められています。このデジタルマガジンが、環境と人間との関わりを考えるのにお役に立てれば幸いです。

なおこのデジタルマガジンは中央大学文学部に開設されている授業科目「特別教養(実践的教養演習)」の成果として刊行されました。この授業に関わってこられた教職員のみなさん、また多くの時間と労力を費やして完成させた学生のみなさんに心から感謝申し上げます。

(文学部教授 大川真)

目次

はじめに(「環境と人間」を問う意味)

第1部 自然環境と人間—環境と向き合う二人に聞く—

起業した大学生が語る「太陽との共存」(伊藤瑛加さんへのインタビュー).....	2
私たちの活動が引き起こす環境変化(志々目友博教授へのインタビュー).....	6

第2部 画面越し、君は何を思ってた?—変化する学習環境—

「オンライン学習環境」に関する大学生の意識調査 2022.....	16
私たちはこう感じた! ~オンライン学習環境におけるメリットとデメリット~.....	21
リアルな声、もっと聞いてみました(フォローアップインタビュー).....	23

第3部 「推しが尊い!」それだけで良いのか!?—大学生とSNS ライフ—

「好き」から広がる SNS の可能性(松田美佐教授).....	26
推し活も楽じゃない!?—SNS は戦場だ—.....	29

おわりに

第1部 自然環境と人間—環境と向き合う二人に聞く—

「環境」という言葉を聞いたらあなたは何を思い浮かべるだろうか。

環境問題といっても、地球温暖化や海洋汚染、水質汚染や大気汚染、更には森林破壊など様々な問題が存在している。そもそも「環境」には、自然環境のみならず、住環境や情報環境など、私たち人間が作り出す社会的環境という意味もあり、「環境」という言葉には様々な意味が含まれている。

第1部では、「環境と人間」というテーマのもと、中央大学に所属し活躍されている2人にインタビューを行った。1人は、高校3年時にSunshine delightという子供の日焼け止めを製造・販売する会社を起業した法学部3年の伊藤瑛加さん。もう1人は、長年にわたって環境政策に関わってこられた理工学部理工学研究科の志々目友博教授である。

伊藤さんのインタビューでは、地球規模での環境問題が、身の回りの環境に伊藤さんが丁寧に目配りすることで考察されてきたことが述べられている。「環境問題」と「身の回りの環境」という2つの視点を取り上げている。伊藤さんは、もともと「紫外線」に問題意識を幼少期から持っており、それがきっかけで幼稚園や保育園に日焼け止めを販売・促進する会社を立ち上げた。「太陽の下で安心して暮らせる環境を」という企業理念を掲げる伊藤さんのインタビューでは、学生業の傍ら、会社を経営している彼女の考え方にぜひ注目していただきたい。

志々目教授でのインタビューでは、身近で今起こっている環境問題について詳しく説明頂いた。今年（2022）の酷暑が記憶に新しいが、ここ数十年の温暖化に関する解説や、私たち1人1人が今日からできる環境問題への取り組みなどについて取りあげている。環境問題というとなると難しいと敬遠されがちだが、事前知識がなくても読みやすくなっているので、肩の力を抜いて読んでいただきたい。

（平田 尚輝）



インタビュー

起業した大学生が語る 「太陽との共存」



(伊藤瑛加さん、写真の提供は本人)

伊藤 瑛加

いとう えいか。中央大学法学部法律学科3年生。
高校3年時に「太陽の下で安心して暮らせる環境
を」つくることを掲げた会社を設立し、現在は株
式会社 Sunshine delight の代表。

日焼け止めに懸ける思い

——最初に、なぜこの会社を作ろうと思ったのか、
動機をお願いします。

この会社を作ろうと思った動機は、実家が農家で、
屋外作業の際に地面からの紫外線の強い反射を受けている
ということを知ったことです。そういった経験から紫外線
問題に興味を持って調べていくなかで、小さい頃からの
対策が必要だという

ことを知り、この事業を始めました。WHO の見解では、
2、3 時間に 1 回塗り直すことが推奨されているんですね。
それを私たちが今から実践しようと言われても、結局忘れ
ちゃうじゃないですか。そうならないためには、手洗いうが
いとか歯磨きみたいな形で当たり前に習慣化できたら、面
倒くさいと思わなくなるので、小さい頃からの教育を
目指しています。

——次に、具体的な事業内容や、製品の紹介などを
お願いします。

幼少期から日焼け止めを定着させることを目的に、
主に保育施設に向けて日焼け止め、紫外線対策教材を一
緒に導入する事業を進めています。絵本は PDF で無料
ダウンロードできるようになっています。構成も、はじめ
に紫外線問題について子どもたちにお話ししても難しい
ので、帽子の必要性とか水分補給の重要性とか、この
絵本を見れば外に出るときに、対策が必要なものがなん
なのかがわかるようになっています。



(日焼け止めクリーム 記者撮影)

あと、商品のパッケージでは子どもたちがアルコールと間違わないように「ひやけどめ」と中央にひらがなで大きく書いています。更には太陽をモチーフにした一色塗りで、子どもたちが押しやすいポンプ式です。パッケージ自体も環境に負荷のないものとして、日焼け止めで初めて紙パックを使ったものになっています。紫外線問題に取り組むにあたって、環境に負荷を与えるのが嫌だったので、プラスチックの使用量を約60%削減しています。

——紫外線によって、子どもたちにどんな悪影響があるんでしょうか？

まず紫外線による影響としては、シミ、シワの他に免疫低下、そして皮膚がんの原因になります。例えば、海の帰りの子どもたちか、肌が赤くなって、暑さやだるさを訴えてくることがあります。その原因に紫外線が関係していると考えられます。あとは皮膚がんになる原因としても、子どもの時に浴びた紫外線の量が後々響いてしまうので、事前予防としても幼少期からの紫外線対策の必要性があります。

——なるほど、日焼け対策を包括的に考えているんですね。

実家が農家なので、「太陽が敵」というイメージはつけたくなかったんです。太陽がないと私たち生活できないんですよね。だからこそ紫外線の悪影響を排除しながら、いかに太陽の恩恵を受けていくかがポイントなんです。弊社の理念も、「太陽の下で安心して暮らせる環境をつくる」ということを掲げています。

——では、事業を進めていく中で苦労したことはありますか？

日焼け止めを子どもに習慣づけることより、日焼け対策の重要性を大人に理解してもらうことの方が大変だったと思います。日焼け止めは、広告の打ち出し方が美白要素に偏っているので、女性をターゲットにした美容品というイメージが強いです。実際にお話を聞くなかでも、日焼けしてるほうが健康的だからこどもには日焼けさせたほうがいいってのご意見をもらったことがあります。年配の方とか、男性がそういった意見をおっしゃる傾向が強いので、その意識を変えていきたいなと思っています。

——今の時点で成果としてはどうですか？

今の子どもたちが大人にならないとわからないことなので具体的には断言できません。ですが、モニタリング期間から導入していくなかで、園児たちは2週間もあれば、自分の手で塗れるようになります。園の先生方が日焼け止めを塗るのを忘れていた日は、「今日は塗らないの？」って子どもたちから声が上がるのは確認しています。

学業と事業の両立

——学生で起業したのは、何がきっかけだったんですか？

起業が身近になったのは、中大付属高校2年の時に取ったアントレプレナーシップ入門という授業がきっかけです。その授業では高校生ビジネスグランプリへの参加が必須だったんですよね。そこで4000もの中からベスト100に選んでいただきました。都の運営のビジネスコンテストでプレゼンをするのとか、楽しいなって思って授業に取り組みました。またビジネスコンテストは、両親が教えてくれたJAグループさんのアクセラレータープログラムに応募してみようかなと思ったのがき

っかけです。逆にやらない理由がありませんでした。

——学生起業をして良かったことと悪かったことがあれば教えてください。

良かったことは年齢の若さが武器になることです。わからないことが前提なので教えてもらえる環境が揃っていました。あと、授業で会社法とかを専門的に学ぶ中で、株主のこととか実務を通して学べる相乗効果はありました。大学2年生のときに受講した基礎演習で、英語で環境問題や企業の環境に対する取り組みとかを学んで、それが身になったと思います。あと、大学生はサークルがあって、インカレである東大の起業の勉強会に参加したり、スポーツ系のコミュニティに所属していろんな価値観に触れることができました。

デメリットとしては、若いので信用力がなくて、1回進んでいた話が立ち消えになったとか、連絡が取れなくなったこともありました。でもそこで、アドバイザーなどサポートしていただける仲間を見つけたり、大企業が開催しているビジネスコンテストで受賞することなどによって信用力は付けられるんだなということに気がしました。

——大学生活も事業も学業も充実してやっていると両立は大変ですか？

成績が落ちちゃったときとかもありました。クラウドファンディングの1か月の追い込み期間とか、勉強が少しおろそかになった時の評価とかはあまり良くなくて中には単位を落としてしまった授業もありましたが、その体験や大変さから学ぶことも多いです。

環境を自分事として考える

——このデジタルマガジンのテーマが「環境と人間」なのですが、環境への関心から他にしてみたいことはありますか。

そうですね、日焼け止めとか発信するときに、まだまだプロモーションとかCMとかでは、「太陽が敵」というイメージもあるので、そういった認識を変えたいと思っています。太陽の紫外線は人間には厳しい面もあるけど、どうやって私たちの生活と両立していくのかを意識しています。ビジネスモデルを考えるときも、太陽との共存を達成するために考えたモデルが、別の環境問題の原因になってしまったら困るので、そのフロー、過程から環境を考えたものにしていきたいなということを思っています。



紫外線対策教材『たいようちゃんとゆうちゃん』

——起業に興味がある学生にアドバイスがあれば教えてください。

一歩踏み出すってとても勇気がいることじゃないですか。でも起業してから、踏み出すことに対するハードルが下がったなと思っています。とりあえずチャレンジしてみれば何かは後から付いて

くるんだなということがわかりました。きっかけって転がっているんですよ。これは楽しそうだなって思っても時間が無いし、自分じゃ無理だ、出来ないと思うことは誰にでもあると思います。しかし困難を感じることに一度チャレンジをしていただきたいなと思います。東京都には支援機関などもあります。環境問題に対しての、社会問題を解決するためのビジネスをやりたくて起業される大学生は増えていると思います。

——私たちのミッションステートメントは「環境を自分事（じぶんごと）として問い直す」なのですが、伊藤さんの取り組んでいる問題で自分たちができることは何がありますか？

もし可能であれば、生涯の18歳までに多くの紫外線を浴びているということを身近な人に一人でも多く伝えて、子どもたちの日焼け止めの使用率を上げたいのと、気象庁の発信している紫外線予報をチェックしてほしいと思います。

また、環境省が「紫外線環境保健マニュアル」※という資料を出しているの、そういうものも読んで自分たちの問題として捉えてほしいですね。

※<https://www.env.go.jp/content/900410650.pdf>

——まとめとして今後の展望と、このデジタルマガジンを読んでいる人になにか一言あればお願いします。

今後の展望としては、30年後、今の子どもたちが成長して親になったときに、子どもと一緒に日焼け止めを塗ることが当たり前になるような社会を目指して活動しています。このマガジンを読んで起業に関心を持った人たちには、起業では、自分が思っている以上に周囲の人たちがサポートしてくださることもあり、自分が思い立ったら悔いの無いように、ぜひチャレンジしてほしいということをお伝えしたいと思います。

記者からひとこと

今回のインタビューでは、日焼け止めの話から起業まで、幅広い話が出来たのではないのでしょうか。インタビューを行うのは初めての経験でしたが、学生だけで行ったこともあり、終始良い雰囲気でした。普段、他学部の学生、特に先輩方と関わる機会はあまりないのですが、このような活動をされている先輩を見て刺激をもらいました。日焼け止めはより身近になっているものの、環境への配慮や紫外線対策の意識など、まだまだ課題が多いようです。加速する温暖化の影響を年々感じる中、数十年後の社会を自分事として考えるきっかけになれば幸いです。後に続く志々目先生へのインタビューも併せて読んでいただくと、より理解が深まると思います。伊藤さんを紹介くださった道上さん、そして伊藤さん、改めてありがとうございました。

(和佐まりあ)



左から 記者・鳥海（文学部）、伊藤さん、記者・和佐（文学部）

撮影 記者・平田（総合政策学部）

インタビュー

私たちの活動が引き起こす 環境変化



(志々目友博教授、写真の提供は本人)

志々目 友博

ししめ ともひろ。中央大学理工学部教授。

1984年に厚生省入省後、環境省(環境庁)、厚生労働省(厚生省)、北海道庁、千葉市等にて、環境政策・水道・廃棄物政策に約30年間従事。地球環境戦略機関、リコー経済社会研究所においても、地球温暖化等の研究を行い、2013年度から中央大学の理工学部、大学院では公共政策研究科、2017年度から理工学研究科。環境政策の立案に役立つ研究を目標としている。

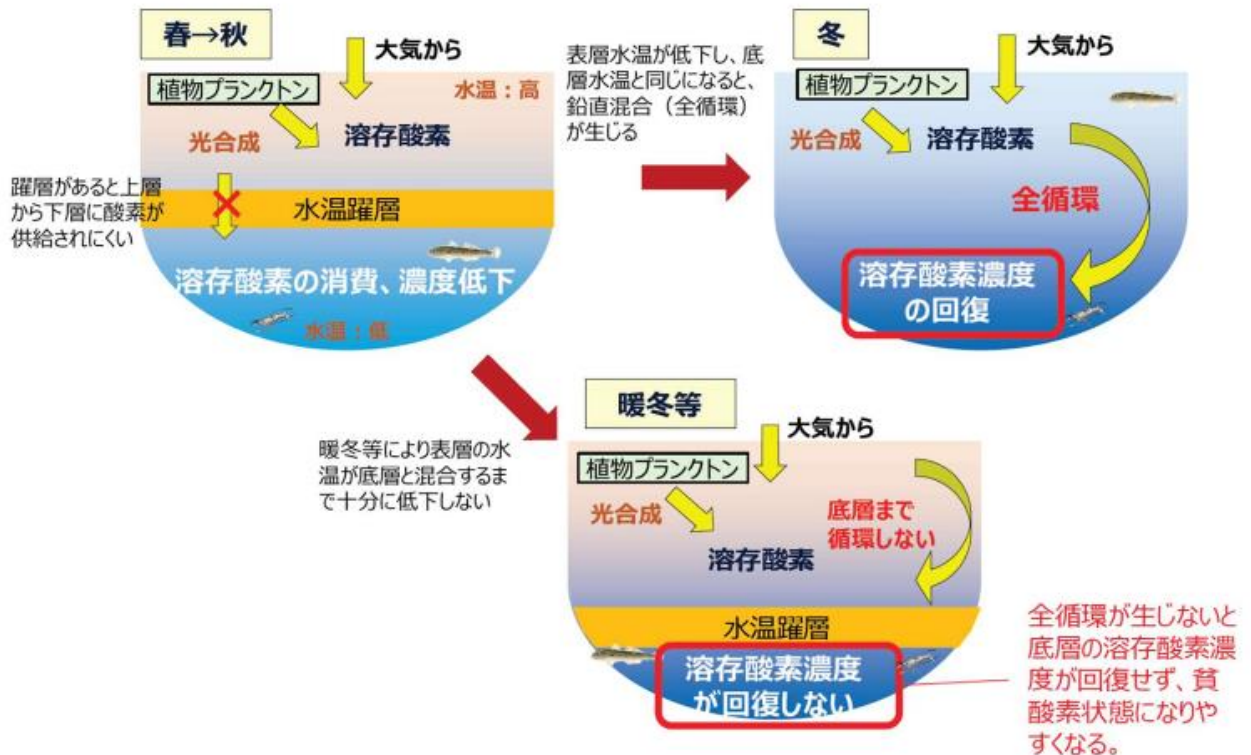
サンマが獲れにくくなった!?

—温暖化による水質の変化については、どのようなものがありますでしょうか。

1点目として、酸素が湖沼や海などの底質まで届かなくなることがあります。お風呂を沸かしたときに温かい水は水面、表層の方に上がってきて、冷たい水が下に沈みますよね。それと同じ現象が湖沼などでもみられます。表層の水温が上がっていくと、低層の水と入れ替わる、いわゆる上下循環が進まなくなります。海や湖沼の一番底の水に、フレッシュな酸素が含まれる水が入っていかず酸素不足になると、底にいる魚が住めなくなって、生息環境が悪化する問題が生じます。

2点目としては、水質がよくない海域や湖沼に、窒素、リンが入ってくると、栄養源となって植物プランクトンがものすごく増殖します。さらに、気温が上がり水温が上がると、植物プランクトンが大増殖するようになります。これが悪臭の問題、あるいは水道水の異臭問題を引き起こします。温暖化は、こういう富栄養化現象の問題を悪化させます。

3点目は、水温上昇によって生態系の変化が起こってくるのが挙げられます。水産庁が分析した研究ではサンマの漁場が北海道の沿岸部から沖合に移行して、その漁獲量も減ったことが明らかになっています。2015年に温暖化の影響もあり親潮が弱くなって、北海道沖の従来の漁場が暖かくなり、サンマが従来の漁場を迂回するようになったようです。その結果、暖水域が元に戻ってもサンマは元のルートに戻らなくなってしまったようです。サンマの漁獲量の減少にはマイワシやサバという競合種の出現や外国船によるサンマの漁獲が増えたことも影響していますが、温暖化もその一因となっています。以上が温暖化による水質への影響の主なものです。



出典：環境省『気候変動による湖沼の水環境への環境評価・適応策検討に係る手引き』

<https://www.env.go.jp/content/900542176.pdf> p2-9

20mL の油を流してしまうと・・・

——私たちが身近にできる環境汚染予防や温暖化対策については何かありますか。

日本ではかなり下水道が普及してきましたが、まだ一部の地域では台所やお風呂からの排水が十分な処理をされずに河川や海域に流れていっているところもあります。また大都市では、雨が大量に降ったときに、下水道で処理できない水も一部外に流れていきます。また、私が環境庁に入った当時からずっと普及啓発している内容ですが、私たちが知らず知らずの間に、ちょっとした天ぷら油の残りを 20mL 下水に流してしまうと、コイが住める程度に薄めることを想定した場合、1 杯 300L 換算のお風呂のバスタブ 20 杯ぐらいの水で

薄めなくてはいけないのです。使用済み油については残ったものは炒め物に使ったり、新聞紙に吸わせてゴミとして捨てたりすることが大事です。米の研ぎ汁も栄養分が高いですから、草木に肥料としてあげると良いでしょう。日常の生活のなかで実践を心がけていくことで、私たちの大切な海や河川、湖沼を守ることができるのではないかと思います。

——環境への負荷は多少の行動なら問題とはならないと思いがちですよね。

そうなんです。私たちの少しの活動で大きく環境に負荷をかけることもあることを、是非お家の方にも伝えてほしいと思います。

この話、水に流さないで！
川や海にやさしい暮らしを始めませんか。

なにげなく流しているものが、大切な川や海をこんなに汚しています！

これを流すと	水がこれだけ汚れる	魚がすめる水質 (BODが1mg/l以下)にするには
	BOD(g)	バスタブ (300ℓ) 何杯分？
天ぷら油 使用済み (20ml)	30	20
マヨネーズ 大さじ1杯 (15ml)	20	13
牛乳 コップ1杯 (200ml)	16	11
ビール コップ1杯 (180ml)	15	10
みそ汁 (1しゃがい) お椀1杯 (180ml)	7	4.7
米のとぎ汁 (1回目) (500ml)	6	4
煮物汁 (肉じゃが) 鉢 (100ml)	5	3.3
中濃ソース 大さじ1杯 (15ml)	2	1.3
シャンプー 1自分 (4.5ml)	1	0.67
台所用洗剤 1自分 (4.5ml)	1	0.67

出典：生活排水対策推進指針
は、東京都環境局自然環境部水環境課HPより
http://www2.keisei.metro.tokyo.jp/open/ksisei/mizu/seikatsu/haisu/keikaku_pamf/torimodori0301.htm

今日から実行できる！暮らしの中の対策メニュー。

生活排水を出しているのは、私たち。ということは、川や海の水を汚さない一番の方法は、私たち自身が“汚れた水をそのまま流さない生活”をすることなのです。みんなで実行すれば、ちょっとしたことに気をつけるだけで、大きな効果が期待できます。

台所ではこんなこと

- 食器や飲み物は必要な分だけつくり、飲み物は飲みきれない分だけ注ぐ。
- 水きり袋と三角コーナーを利用して、野菜の切りくずなどの細かいごみをキャッチ。
- 食器を洗う前に、油污れなどはふき取ります。
- 残った油は凝り固めて使ったり、炒め物に使うなど、できるだけ捨てない努力を。やむをえず捨てるときは新聞紙などに吸わせてから。
- 米のとぎ汁は植木の水やりに、養分を含んでいるので、よい肥料になります。
- 食器を洗うときは強い掃き帚を使用し、洗剤は適量の水で薄めて使います。

お風呂ではこんなこと

- 髪の毛などは排水口に目の細かいネットを掛けてキャッチ。
- シャンプー・リンスは適量を守りましょう。
- お風呂の残り湯は洗濯に。温水なので汚れ落ちがよくなります。(衛生上、すすぎは水道水で。)

洗濯ではこんなこと

- 洗剤は計量スプーンでしっかり計って、多く入れても汚れ落ちがよくなるわけではありません。
- くす取りネットを取り付けて、細かいごみをキャッチ。

トイレではこんなこと

- トイレは使用後にちよこちよこっと掃除しましょう。そうすれば、洗剤を使ってゴシゴシ掃除する回数はグーンと少なくて済みます。

出典：環境省『生活排水読本』「家庭排水の汚濁負荷と生活排水対策」

<https://www.env.go.jp/water/seikatsu/pdf/03.pdf>

家庭からも排出されている二酸化炭素

次は温暖化の対策をお話しします。我々の家庭から出ている CO₂ をみなさんと一緒に考えてみます。2020 年度は、CO₂ の排出量は日本全体では 10.4 億トン、そのなかで我々の家庭から出ているのは約 16% の 1.66 億トンでした。たとえば、我々は CO₂ だけではなく家庭からゴミも出しています。家庭等から出している一般廃棄物は、同じ 2020 年度で 0.42 億トンなんですね。廃棄物と比較すると目には見えませんが、大量の CO₂ を出していることがわかります。これを削減していくことが非常に重要になってきますが、これまで我々の家庭部門やオフィスなどの事業部門からの排出量は、1990 年頃と比べると、どんどん増えてきま

した。そこで国は、2013 年度と比較して国全体の温室効果ガスを 2030 年度に 46% 削減する目標を立てました。家庭部門についてはより多く削減するというので 66% という最も削減率の高い値が設定されています。家庭における対策は非常に重要になります。具体的な対策のひとつとして、例えばエアコンの使用時間を 1 日 1 時間短くしてもらおうと、大体 1 台あたり 1 年間で 26kg 削減することができます。

——1 時間でもそんな量になるんですね。

数値化すると分かりやすいですね。ちなみに日本全国で 1 世帯から 1 年間に排出される温室効果ガス、二酸化炭素の排出量は 2720kg になります。

それと比べるとわずかな量ですが、こういう対策を私たちが積み上げていくことでも排出削減に役立つんです。いま言ったような対策も含めて、環境省のゼロカーボンアクション30というサイトがあります。

<https://ondankataisaku.env.go.jp/coolchoice/zc-action30/>

これを見ていただくと家庭での対策にどれぐらいの削減効果があるのかわかります。また、「うちエコ診断」というソフトもあります。

<https://webapp.uchieco-shindan.jp/>

これはみなさんのご家庭の電気使用量等の情報を入れると、他の家庭と比べてどうなのか、あるいはプラスアルファの対策を検討すると、光熱費もこんなに下がりますよというように、アドバイスをしてくれますので、活用されると身近な対策として進めていけるのではないかと思います。

——小さな取り組みが大切ですよね。いま現時点でどのぐらいの削減率が達成できているのでしょうか。

そうですね。2020年度での削減率は二酸化炭素以外の温室効果ガスを含めた、対2013年度の削減率は18.4%となっています。二酸化炭素ベースでは、20.8%となりますね。

海面上昇の原因、実は・・・

——水に関して温暖化や環境汚染が私たちに引き起こす悪影響はどのようなものがありますか。

最近短時間に非常に多量の雨が降ることが多くなっていますので、国土交通省の資料によると濁水が増えることが問題になっているようです。それ以外に、温暖化が進むと水の需要が増え、飲料水、あるいは農地で使う需要、さらに夏の空調の使用でもかなり水の需要が増えてくるわけです。

水自体の量が十分に確保できるのかという問題があります。気候変動は雨がたくさん降るときもあれば、晴天が続いてなかなか雨が降らないという現象も両方起こり得ますので、これもひとつの大きな問題になってくると思っています。

——そうすると食物にも影響が出ますね

そうですね、まだ必ずしも顕在化しているわけではないのですが、海面上昇も大きな問題なんです。私も学生さんと話すと、氷が溶けて水が増えるのですか、ということ時々聞かれることがあります。氷が溶けて水が増えるというよりも、実は温度が上がって水の体積が大きくなる影響の方が大きいのです。4℃の水が一番密度が高くなっていますので、それよりも温度が上がれば上がるほど膨れていきます。海の面積自体は変わりませんので海面が上昇するのです。そうすると、海に流れ込むような河川等において塩水が逆流したり、海に近い地下水の中に塩水がしみ込んできたりして、塩水化が起こります。このように大事な水源が失われていく可能性が懸念されています。また、特に雪が少なくなると、例えば米所である新潟などの日本海の地域で米も作りづらくなります。米は5月ごろにじわじわと流れてきた雪解け水を活用して田植えをしています。そういう稲作のサイクルも狂ってしまうということも指摘されています。

有害物質による影響

環境汚染が私たちに引き起こしている影響について言うと、1960年代ぐらいには有機水銀による水俣病、富山等で発生したカドミウムによるイタイタイ病、あるいは四日市の大気汚染などいろんな問題が発生したわけなんです。

——四大公害病ですね。

よくご存じですね。四大公害病に関連するような有害物質による汚染問題はかなり改善されてきました。もちろん被害を受けている方はまだたくさんいらっしゃいますが、水質はよくなってきて、新たな被害は少なくなってきました。最近話題になっているのは、残留性有機汚染物質、POPs という略称ですが、これは一度環境中に出ると分解し難い有害な物質なんです。さらに生物、人間の体に入ると高い濃度になっていきます。かつこの物質は、南の緯度の低いところで排出されたものが気象現象で緯度の高い北へ移動します。北半球においては北極のシロクマにもこういう化学物質が検出されており地球規模の化学物質の問題が起っています。水や大気が POPs を運ぶ重要な媒介となっていますから、水等への排出抑制対策も重視されています。

廃プラスチックの海洋汚染問題

他の問題としては、プラスチックの海洋への流出が非常に大きな問題になっています。廃棄物のリサイクル対策等を併せて進めていかななくてはいけません。法律レベルでも今年の4月からプラスチック資源循環促進法が施行されました。みなさんも新聞やニュースで見たことがあるかもしれませんが、大きな小売店や飲食店で使い捨てのプラスチックのストローやスプーンは有料化したり代替の素材を使用することになってきています。こういう形でプラスチックの廃棄物を減らして、ひいては海に与える影響を軽減していくことが、非常に重要ではないかと思えます。みなさんも実施されているように、マイボトルやマイバッグを利用する形でプラスチックのゴミを削減することが非常に大切なのかなと思っています。

——マイバッグ等については否定的な意見を SNS でも見かけますが、大事な取り組みですよ。

廃プラスチックの海洋汚染は、この10数年前からかなり問題になってきています。私も環境庁にいた1990年代半ばですが、国がプラスチックゴミの調査を始めた時期にその調査を担当したことがあります。特に日本海側において、韓国、中国、北朝鮮等からのプラスチックゴミの漂着が国際的な問題になってきました。プラスチックによる汚染の問題について言いますと、歯磨き粉や化粧品に入っているマイクロプラスチックがあります。これはなかなか取り除くことはできないのですが、国内外でもそういうものを削減する動きが出てきています。また二次的なマイクロプラスチックというものもあります。私たちが使っているような大きなプラスチックは自然環境中に排出されると、太陽光の紫外線などにより壊れていき、細分化されてマイクロサイズになります。これも元は我々のゴミなんです。こういう大きなサイズのプラスチックも併せて回収していかないといけないんです。

急激な気候変動による影響とは

——ここ数十年の急激な気候変動による影響はどのようなものがあるのでしょうか？

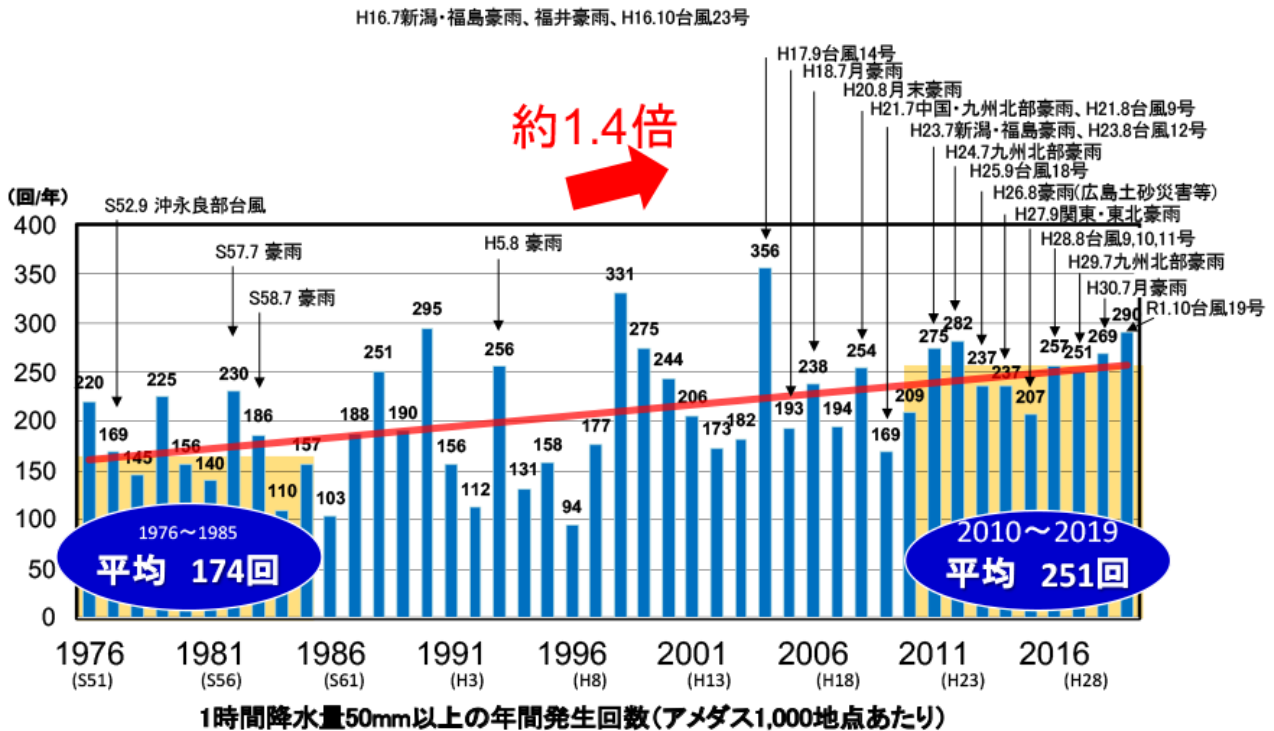
この数十年の急激な気候変動により、いくつかの現象が明らかに統計として確認されてきました。この中のひとつは時間降水量が50mm以上になる回数の増加です。都市の災害対策を計画するうえで、この時間降水量50mmが従来ひとつの目安として使ってきた数字です。実はこの50mmを超えると、大きな災害が発生する可能性があります。国土交通省の資料では、1976～85年の10年間だと50mmを超えたのは年間174回でしたが、この過去10年ぐらいで251回にまで増えています。

みなさんも非常に激しい雨を経験されていると思いますが、気候変動の影響により災害に結びつくような雨が明らかに増えているのではないかと考えられます。

—数値でも体感としても明らかですね。

気候変動を別の角度からお話しします。たとえば世界全体の保険で支払われた損害額ですが、2010年頃から国内外で気候関連の保険の支出がなされてきているのですが、ここ数年でその額が急増しています。また、熱中症による死亡者数は、2010年以降、1000人を超える年が出てくるようになったといわれています。死者数は明確に増えてきています。実は東京消防庁の熱中症患者の搬送者数の過去10年のデータを利用して、私の研究

室の学生と一緒に解析してみたのですが、日平均気温が30℃を超えると、25℃のときに比べて8倍近くの熱中症搬送者数になるということがわかってきました。こういう問題は国内だけじゃなくて、世界的に重要な問題になってきているといえるのではないかと思います。



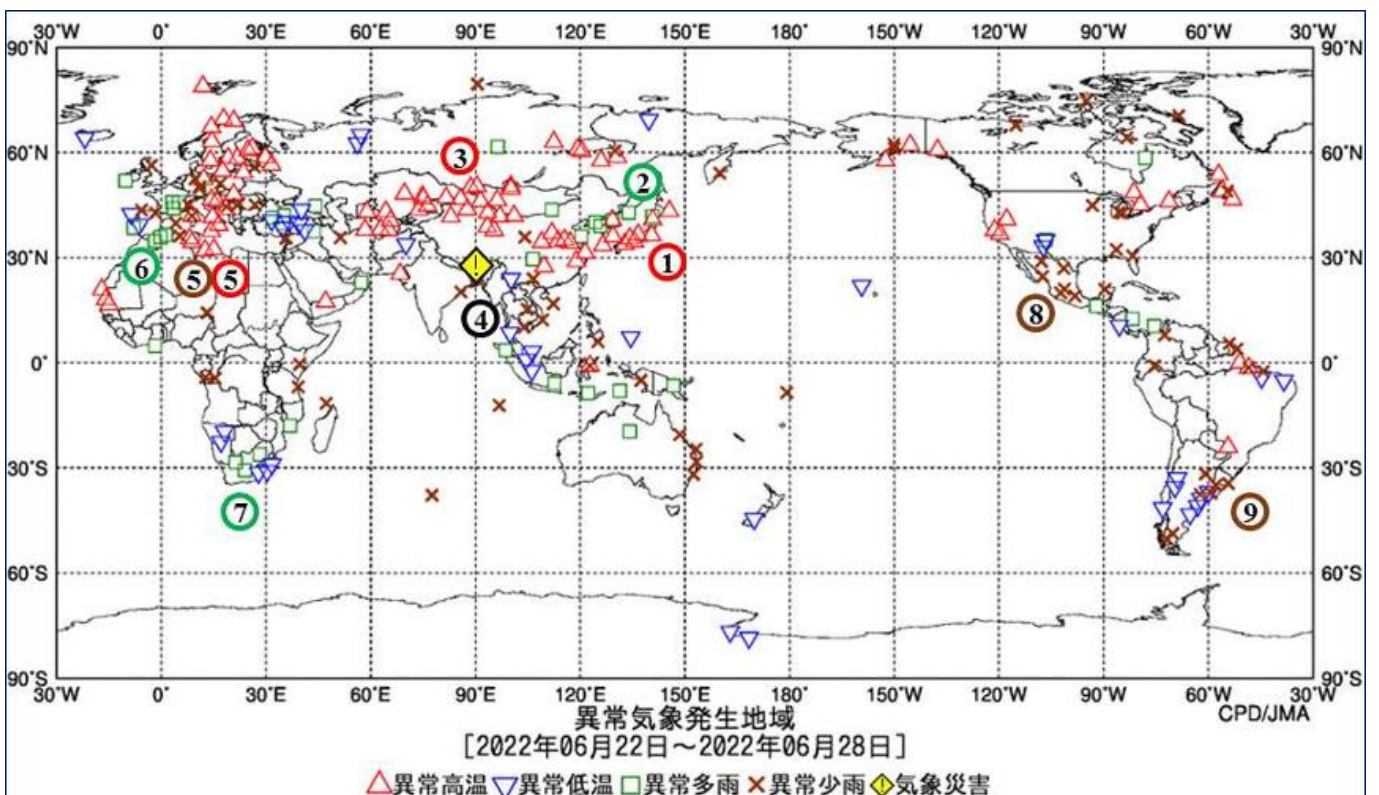
出典：国土交通省 水管理・国土保全局 河川計画課 技術基準係「カワナビ vol1 まち全体で、みんなで水災害に備える」
https://www.mlit.go.jp/river/kawanavi/prepare/vol11_1.html

1200年に1度が、5年に1度に！

——今年（2022年）の6月は非常に暑かったですが日本を含む世界中で猛暑が記録された原因は何ですか？

2022年の猛暑をどういうふうにか考えるのかということですが、世界各地で同じような、熱波のような現象が確認されたことがまず注目されます。気象庁による次の図を見ていただくと、この赤い三角で示された地域が6月に異常な高温が発生した地域です。ヨーロッパ、中央アジア、日本のあたりですね。この地域の高温は連携するような形で起こっています。ヨーロッパ各地で40℃を超えたという気象庁のデータがあります。また、8月には日本海寄りのところで観測史上初めての高温がたくさん記録されました。2022年はそういう年だったのですが、6月の高温化の原因を温暖化だけに

求めるのは難しく、いろんな影響が重なって高温が発生したと考えるのが妥当です。原因のひとつは、偏西風が関係しています。偏西風は地上上空10km近くのところを吹いていますが、北側に膨らむような形で蛇行すると、そこに高気圧がブロックされたような形になります。これが日本列島の上に居座っていました。実は、著名な気象学者の先生によると、この偏西風が蛇行することも、温暖化の影響で北極圏の気温が上昇し、南の低緯度の地域との温度差が小さくなったことが原因のようです。その結果、偏西風のスピードが落ち、蛇行しやすくなっているのではないかということのようです。



出典：気象庁 異常天候図表

<https://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/monitor/extfig/extindex.html?tm=weekly&el=fgtemp>

——かなり複雑ですね

まだあります。ペルー沖のところの海水温が今年は例年よりも低い、ラニーニャという現象がみられました。この海域の水温が低いと、貿易風という東から西に吹く風が非常に強くなり、そうするとフィリピン沖の東南アジアの上昇気流、低気圧が非常に強まります。すると上昇した空気はどこかに降りなければいけないですから、太平洋あたりに降りてきて高気圧になるのですね。先ほどお話しした偏西風の蛇行によってブロックされた高気圧と、この太平洋の強化された高気圧と、布団が2枚かかったような形で日本列島を覆っていたというのがひとつの要因のようです。偏西風の影響とこのフィリピン沖の低気圧が発達し、例年よりも海面の水温が上がってきたことが今年の猛暑に影響を与えています。ですからひとつの原因だけではない、数年の気候変動と短期的な気温上昇とが相まって異常な気候になってしまったと理解した方が良くと思います。気象庁の気象研究所の発表によると、2022年の猛暑というのは人為的な温暖化がなければ1200年に1度くらいの確率で起こる高温だったようです。ですが、今年の夏のような状況が、温暖化が進んだ状況では、5年に1度くらいの頻度にまで上昇してきているのではないかと分析されています。だいたい240倍くらいの確率でこういう高温が発生する可能性があることとなります。様々な機関の発表や学説を総合した上で、2022年の高温化も理解できるのではないかと思います。

学生世代へのメッセージ

——今の中央大学生や中央大学への入学を目指している高校生たちに一言お願いします。

温室効果ガスの排出量を2050年頃に実質0にするというカーボンニュートラルの動きが国際的

にも国内的にも決まり、世界も日本もそれを目指して動いています。2050年という先のですが、今から約30年後ですね。これから大学に入ってこられるような方、また皆さん方も含めて今大学生でいらっしゃる方は、ちょうど社会で中間管理職くらいの責任ある立場で活躍される一番脂ののった時期だと思います。2050年までに、脱炭素社会を作っていくかなくてはいけないと思います。また温暖化による影響もこれからどんどん出てくると思いますので、長期的な気候変動や温暖化といった現象を、自然科学だけではなく、政策面からも学ぶ必要があります。またこのマガジンが文学部の授業で作られているように、分かりやすく文章で伝える技術も必要だと思います。中央大学では是非こういう問題に取り組んでいく若い人が育ってくれることを心より期待しています。



志々目教授へのインタビューはオンラインで行った。

写真は中央大学にて。撮影は授業担当教員。

左から、記者・平田（総合政策学部）、記者・鳥海（文学部）、記者・和佐（文学部）

編集後記

志々目教授へのインタビュー記事をお読みいただきありがとうございました。

インタビューでは事前に質問をお送りしたところ、説明資料を細かく作ってくださりじっくりと解説してくださいました。対面で行った伊藤さんのインタビューとは違いオンラインで行ったため間合いを考えながらインタビューとしての言葉のやりとりをしていくのが難しかったと感じました。

編集作業ではインタビューを書き起こすと2万字を超す文字数であり、字数制限を気にしつつ編集していく作業が大変でした。特に、教授の言い回しやつなぎ言葉をインタビューの個性としてどのくらい残すかを思い悩み苦戦しました。行き詰まっているところをグループメンバーに編集してもらい、また志々目教授からも的確な校正をいただくことで、私とは違う視点から削ってもらい、どうにかまとめることができました。

インタビューを受けてくださった志々目教授、改めてありがとうございました。(烏海 空雅)



第2部

画面越し、 君は何を思ってた？ —変化する学習環境—



「オンライン学習環境」に関する 大学生の意識調査2022

中央大学文学部学生有志が現役の大学生を対象に「オンライン学習環境」に関する意識調査を行った。2019年冬から日本国内においても新型コロナウイルスが猛威を振るい、大学生の学習環境は基本的に対面からオンラインへと移行することになった。そのなかで、学生たちは急激に変化する学習環境への対応に追われたのである。対面授業が再開した今日においても、多くの大学がオンライン授業と対面授業を併用している。

このような現状において、調査者らはオンライン学習環境に関する意識調査を実施、分析することで、この時代を生きる大学生の〈環境の変化〉に迫った。今回の調査では、学習面と対人面に軸を置き、オンライン学習環境下での実態と当事者たちの意見の集約を試みた。

調査概要

調査期間は、8月1日から10月9日までの70日間である。Google formを使用してWEBアンケートを作成し、調査者らのネットワークを活かして全国の現役大学生に調査協力を依頼した。無記名式アンケートでは、まず調査の趣旨およびデータの扱い方等を説明し、続いて「学習面」「対人面」「今後の希望」に関する設問（選択式・記述式）で構成された。今回の調査で得られた有効回答は70件である。最後に、調査協力者のなかから許諾が得られた4人に、それぞれ異なる内容でフォローアップインタビューを実施し、さらに「リアルな声」を聴いてみた。

調査協力者の属性

◆ 入学年度

2020年度以前：8人（11.4%）
2020年度：28人（40%）
2021年度：29人（41.4%）
2022年度：5人（7.1%）

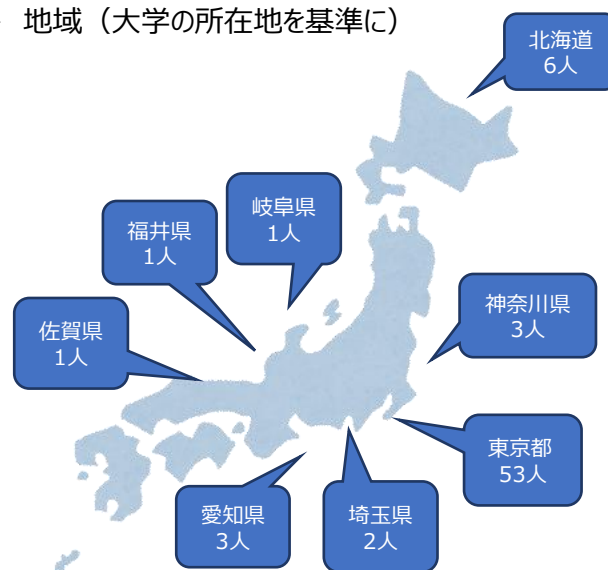
◆ 通学距離

① 1時間以内：43人（61.4%）
①① 1～2時間：26人（37.1%）
①①① 2時間以上：1人（1.4%）

◆ 居住形態

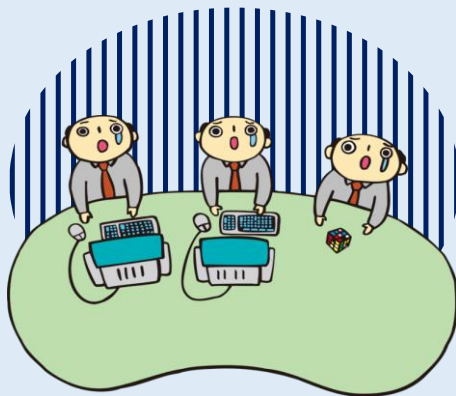
実家：43人（61.4%）
一人暮らし：23人（32.9%）
寮：1人（1.4%）
その他：3人（4.2%）

◆ 地域（大学の所在地を基準に）



オンライン学習環境 オンライン授業についてのホンネ

オンライン授業中…



入学したばかりで友達もいないから、履修登録の作業誰にも相談できない…

家で受けると休息の場と学習の場が同じになるから集中しづらい！

このアプリの使い方も分からないし、ブレイクアウトルームって何？！

…などと思ったことはないだろうか？

これらの意見は次ページで紹介する「オンライン授業で困難だったこと」に関する自由意見で実際に書かれた内容だ。数年にわたりオンライン学習をリアルに経験している学生達は、現在何を感じているのか、実際にアンケート結果を見ていこう。

画面越しではできない授業

2020年度ではどのような科目で対面授業を受けたか

(複数選択可) (縦軸は回答数)



体育・技術関連の実技がNo.1に！

前提として2020年度の大学の授業を、対面で受けたことがないと回答したのは39人、受けたことがあると回答したのは31人であった。一番多かった回答は吹き出しの通り、「体育・技術関連の実技」である。二番目に多かった「教育関連の実習科目」に関してだが、実際に対面授業を受けた方へ行ったフォローアップインタビューと関連した記事がある。このセクションの最終ページを要チェックだ。

分からない、多い、聞きづらい！

オンライン学習環境で困難だったことは？（複数選択可）  = 10人

▽動画学習や資料配布が中心になる授業もあり、学習内容に関する理解度が低下した

36人 

▼オンライン授業が増えた影響からか、大量の課題が出された

35人 

僅差！

▽人間関係を築きにくく、学習面にも支障をきたした

34人 

▼PC使用の時間が圧倒的に増え、目の疲れや頭痛などの身体の不調があらわれた

22人 

▽安定的なネットワーク環境やPCなどの機器類が整っていなかった

12人 

▼その他自由意見（前ページ意見）

5人 



オンライン授業でフリータイム増加？

オンライン学習環境で良かったことは？（複数選択可）  = 10人

▽通学する必要がなくなったり回数が減ったため、時間・体力・費用の面で負担も減った

59人 

▼任意のタイミングで授業動画を視聴できる科目が増え、時間の使い方がより自由になった

41人 

▽学習用の動画コンテンツが提供され、分からなかった部分を繰り返して視聴できた

33人 

▼通学する必要がなくなったり回数が減ったため、体調不良や悪天候でも授業を受けられた

32人 

▽通学しやすい場所に住む必要がなくなり帰省や実家暮らしができた

10人 



アンケート結果は以上ようになった。

困難であったことへの回答においてトップ3にはほとんど差がない。学生は複数の困難を抱えながら、オンライン学習を行っていたと分かる。

一方良かったことへの回答では、時間・体力・費用の負担が減ったことが最も多い結果となった。しかし次点には時間の使い方の自由さが挙げられているため、学生の大半が時間に関する自由度が上がったことを利点として考えていると言える。

それでは人間関係についてはどのように感じていたのだろうか。次のページを見てみよう。

オンライン学習環境 人とのつながりについてのホンネ



教師とのコミュニケーションが取りづらかった...



なんか、SNS使える人だけのコミュニティがすごくて
学校行った時めっちゃぼっちになった...



正直良さを特に感じない...

オンライン学習環境において困難だった点、良かった点に対する回答で上記のような意見があげられた。ネガティブな意見が目立っているが、実際にオンライン学習環境での大学生活を送った学生たちは画面越しでの「人付き合い」をどう感じているのだろうか。メリット・デメリットそれぞれ詳しく見ていく。

大学での付き合い、オンラインだと苦労が多い?!

オンライン学習環境に変わり、「対人面」で最も困った点は？（複数選択可）

新しい人間関係を築きにくくなった



44

= 4人

友人・知人と連絡を取る頻度が下がった



12

文面のみ・音声のみの交流において対面よりも伝え方を考える必要があった



20

コミュニケーションを取る対象や相手が限られた



40

対人関係の幅が狭くなった



36

その他



2

「新しい人間関係を築きにくくなった」44人、「コミュニケーションを取る対象や相手が限られた」40人、「対人関係の幅が狭くなった」36人と、トップ3を占めたのはこれら三つの回答だ。オンライン上で人間関係を築き、保つことに対し困難を感じている人が多いことがわかる。特に「新しい人間関係を築きにくくなった」という回答を選ぶ人が多く、大学という新たな世界で新たに人間関係を築くことに対し、パソコンやスマートフォンのディスプレイは大きな壁になっているのだろう。

オンラインだからこそできる、関わる人の取捨選択

オンライン学習環境に変わり、「対人面」で最も良かった点は？（複数選択可）

zoom飲み会など、オンライン上で手軽・気軽に集まりやすくなった



= 4人

居住地などの物理的距離に関係なく交流が図れるようになった



元々仲が良かった人とはより親密になれた



対人関係によるストレスが軽減されたり回避できたりした



特になし



最も多かったのは42人が選択した「対人関係によるストレスが軽減されたり回避できたりした」という回答だ。この回答は先ほどの困難だった点として挙げられた「対人関係の幅が狭くなった」ことによる副産物ともいえるのではないかな。また、「特になし」という回答は、私たちが準備したものではなく、自由記述として書かれたものであるため、オンライン学習環境での対人面にメリットを感じない人もいることがわかる。

「#春から〇〇大」とテスト勉強

—学習面・対人面のアンケートを通して感じたこと—

「このアプリの使い方も分からないし、ブレイクアウトルームって何?!」

「SNS使える人だけのコミュニティがすごくて学校行った時めっちゃぼっちになった...」

私たちはオンラインツールを使いこなす必要に駆られた。これらを活用できるか否かで、人間関係も学習面も充実度が変わる。人間関係の基盤ができていて、わからないところを相談し合うことが初めて可能になるためだ。コロナ禍でオンライン授業が増え、一人で学ぶことの大変さが表面化した。

アンケートの自由意見では「通信大学」というキーワードが挙げられている。このことから通信大学と対面授業のある大学の差とは何かを改めて考えさせられた。対面授業の意義は、先生や他の学生などの関わりの中で学んでいくことにもあるのではないだろうか。



私たちはこう感じた！

～オンライン学習環境におけるメリットとデメリット～



いつでもどこでも受講できるので、
時間の融通が利きます。



座学の授業が動画で配信された場合、
授業を繰り返し学習できるので
自分の理解度に合わせて学習に割く
時間を調整できます。



通学時間を短縮できるので、
学習を効率化できます。



授業への強制力が低いため、
集中を欠いてしまうことが
あります。




発表やディスカッションは、
オンラインよりも対面のほうが
取り組みやすいと感じました。




実技の習得は対面で授業を受けな
いと理解度が低いと思いました。





授業料や施設維持費を払っているのに、
学校の設備を満足に利用できないのは
もったいないと感じました。また全面オンラインに
なってしまうと、通信大学との差異が生まれなく
なってしまうのではないかと思います。



直積的なコミュニケーションが
取れないため、友人ができませんでした。
また、孤独を感じることもありました。



OPINION

新型コロナウイルスによる外出自粛などの影響を受け、オンラインでの授業体制が急速に発展したが、今回の調査を通して、オンライン学習環境下における大学生を取り巻く光と影が明らかになった。ここ数年でオンライン授業の効率性など、オンライン教育の良さが改めて認識されたことで、大学の学習環境におけるオンライン教育の導入と拡大が見込める結果だと感じた。今後もこのような流れは持続する可能性がうかがえる。一方で、対人面やモチベーションの面、実技習得の面では、オンライン学習環境下になるまではあまり意識されてこなかった、新たな問題も明らかになってきている。

今後、近年のオンライン教育がもたらした新たな学習環境の功罪を踏まえ、日本の教育政策・制度と各教育現場は大きな変革を迎えることが予想される。その際に、今回の調査結果で明らかになったような、教育現場の当事者としての学生の意見が反映されることを、同じくコロナ禍を大学生という立場で過ごした身として望んでいる。学生というステークホルダーが、変革のための議論や見直しの場面にも対等な立場で参画することで、教育の現場でも「マルチステークホルダー主義」を実現していけるのではないだろうか。学ぶ側も教える側とともに新たな学習環境の形成という課題解決にあたることで、自分たちの学生時代が新型コロナウイルスに振り回された苦い思い出として留まるだけでなく、持続可能な発展を進める一柱にできるのではないかと考える。

リアルな声、もっと聴いてみました



オンライン学習と「教師」の学び方

教職課程を取っていると、オンラインで学んだ内容は実習に反映させられるのか、不安を抱くことがあります。ゆえに今回は2020年度に実習を行ったAさんへ、実体験を伺いました。

結論から述べますと、報告会や友人などと相談することを通して現場のイメージは付いていたそうです。しかしいざ現場に出てみると専門用語が飛び交っており、混乱は避けられなかったとのことでした。一方、実習のおかげで具体的な将来像を想像することができ、結果としてやる気も向上したそうです。

オンライン学習環境であっても、自主的に情報を集めることで事前準備をすることは可能であるのだと気付かされました。しかし自身の教

師像を見据えることができるという面において、リアルな実習に勝るものはないのでしょうか。

また「画面を見続けるのは辛いと思うが、子供たちの未来を託されている立場として、今から責任を持って勉強に勤しんでほしい」というAさんの言葉が胸に響きました。

オンライン授業はどのような形態であれ、画面越しで行うものです。ゆえに怠けようと思えばいくらでも適当に済ませられる側面があります。しかし堅実に学び続けた人と知識の差は確実に生じていくでしょう。オンライン学習環境が当たり前となった現在において必要なことは、己を律して学び続ける姿勢であるのかもしれませんが。

(桑田 笑歩)

コロナ禍を北海道で生きる

北海道の大学と東京の大学の間には、コロナ禍の生活・意識に何らかの違いがあるのではないかと。私はそう考えて、北海道で大学生活を送って3年目になるBさんにインタビューを行いました。しかし、いざ話を聞いてみると、そこに違いはほとんどなく、ある意味平等な学習環境であると言えることが分かりました。

では違いはまるでないのかというと、そうではありません。大きな違いは、現在の授業形態です。北海道の大学ではほとんどの授業を対面で行っているそうです。しかし、実際にオンライン授業・対面授業のどちらも経験した学生としては、もっとオンライン授業を導入すべきだと感じているとのことでした。担当の先生が主に話す講義形式の授業では、あまり対面授業のメリットを感じないためです。

人間関係についての問題ではどうなのか。私は、北海道の大学は地元の高校出身者が多く、その地方を地元としない人にとっては、少し疎外感を覚えてしまうのではないかと考えていました。しかし、実際にはそんなこともなく、オンライン上でSNSなどを駆使し、ゼロから関係を築く必要がある点も同様でした。

ちなみに、インタビューを行う中で北海道ならではの出来事だな、と感じたことが一つあります。エアコンがない家が一般的な北海道。コロナ禍には、パソコンの熱と夏の暑さでパソコンに負荷がかかり落ちてしまうことが何度かあったそうです。実際に話を聞いてみないとわからない、予想もしていなかった問題を抱えていることがあるのだとインタビューを通して感じました。

(高田 雪光)

オンライン留学の光と影

「時差が一番大変だった」。そう語るのは高校3年生の際にカナダのバンクーバーにオンライン留学をしたCさんです。高校1年生からバンクーバーに留学をしていたCさんですが、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大に伴い、日本に帰国する羽目になりました。以降、最後の1年間はオンライン留学を余儀なくされてしまいました。そんなCさんが最も苦労したのが時差だといいます。カナダと日本の時差は約14時間。Cさんが通っていた高校では、アジア圏の学生たちとヨーロッパ圏の学生たちを二つのグループに分け、2回にわたり授業を行いました。時差のため簡単に連絡が取れず、友人との関わりの密度は低下したといいます。

また、Cさんは言語学習において、対面でのディスカッションやスピーチがなくなり、リスニングとスピーキングの能力が低下した半面、レポートの課題が増えたためライティングやリーディングの能力が上達したと話します。ネガティブな側面がある一方で、自国文化の中で暮らしながら留学できたことは非常に良かったといいます。「日本での進学を希望していたため、オンラインで留学しながら日本で進路の準備を行えたことはありがたかった」とオンライン留学の利点を語ってくれました。オンライン環境下でも弱みを強みに変えようとする同世代の力強い思いを感じました。

(朴 泰佑)

服飾系大学の学生として

今回お話を聞いたのは、服飾系大学に通う、3年生のDさんです。彼女の通う服飾系大学では、服のデザインや作成といった実技授業があり、コロナ禍の影響を多く受けました。インタビューを通して彼女が語ったのは、授業を受けるなかで見えてきた意外な利点・難点でした。

特に印象的だったのは、遠方の美術館にオンラインで訪れられるという点です。昔のデザインや、ドレスの歴史など、服飾の知識を身につけるためには、過去の作品から学ぶ必要がありますが、デジタル化された様々な資料をオンライン上で見ることができるのは、コロナ禍で普及した大きな利点の一つと言えるのではないのでしょうか。しかし一方で、デジタル美術館は、見ることができる範囲に限られるなど、改善の余地も残されています。

また、実技授業においては、パソコンを使って行う作業はオンラインの方が効率の良い場合もあるのではないかと、という意見も伺いました。デザインのパターンをおこす際など、パソコンを使用する授業は、マンツーマンシステムで、他の人が指導を受ける間は、対面にも関わらず待ち時間となってしまっていたそうです。そういった技法が、一斉にオンライン上で配信されれば、生徒側の視点でみると、より効率的に理解を深めることができるのではないのでしょうか。

実技→対面授業、その他→オンライン授業という方式ではなく、授業内容に応じた切り替えを行うなど、各方式の利点を体験者として掬い上げ、発信することがこれからの授業システムを構築するに迫り重要だと感じました。

(河村 帆乃)



#〇〇好きと繋がりたい

#生誕祭

#担当

第3部

「推しが尊い!!」

それだけで良いのか!?

-大学生と SNS ライフ-

#匂わせ

#拡散希望

SNS で知らず知らずのうちに自分好みの環境を形成していないだろうか。またそのことに疑問を持ったことはあるだろうか。アイドル、アニメ、ゲーム、本、漫画など、人によってさまざまな「好き」があるだろう。2021年1月、第164回芥川賞を『推し、燃ゆ』(河出書房新社)が受賞、次にくるマンガ大賞2021コミックス部門で『【推しの子】』(集英社)が一位を受賞するなど、現代社会に「推し」や「好き」が大きなインパクトを与えている。いうまでもなく、私たちがこんなにも「好き」に没頭できるのは SNS が形成するデジタル環境のおかげである。冒頭の問いはなにも自分好みの環境を形成することが悪いといっているわけではない。ただ、こうした状況を多角的に捉え、メリットとデメリットを知ることが、情報社会の荒波を生きていくために必要であると思う。まずは SNS という身近なツールが私たちを取り巻く環境をどう形成しているのか考えてみよう。本記事では、中央大学文学部・松田美佐教授の論文『「好き」から広がる SNS の可能性』と、学生4名による座談会を通じて、私たちがおかれているデジタル環境を共に問い直していく。

「好き」から広がる SNSの可能性

中央大学文学部 松田美佐教授



「おっかけ」という趣味の増加

社会学の研究者として、アンケート調査は何度もおこなっているのだが、結果をはじめてみるときは、いつもどきどきする。ときに、思いもよらぬデータに出会うからだ。

最近驚いたのが、「あなたにとってもっとも大切な趣味」として、「アイドルやタレントのおっかけ」を選んだ人の割合である。2020年の調査では、

杉並区の女性の12.6%、松山市の女性の15.2%が「もっとも大切な趣味」として、「アイドルやタレントのおっかけ」を選んでいたので（辻・大倉・浅野・松田, 2021）。

この調査はグローバル若者研究会が東京都杉並区と愛媛県松山市の20歳の若者を対象におこなったものであり、同じ形式の調査を2005年、2009年、2015年と同じ地域、同じ対象でおこなってきたため、選んだ人の増減を検討することもできる。その結果が、次の表1である。

表1 「アイドルやタレントのおっかけ」を「もっとも大切な趣味」として選んだ人の推移

(2005～2020年)

		2005年	2009年	2015年	2020年
女性	杉並区	0.7%	2.3%	5.8%	12.6%
	松山市	0%	2.6%	5.7%	15.2%
男性	杉並区	0.8%	0%	1.9%	2.2%
	松山市	0%	0%	0%	1.6%

「もっとも大切な趣味」を「音楽鑑賞・オーディオ」「映画や演劇」など三十数個の選択肢から一つ選ぶ設問なのだが、2005年にはほぼゼロであった「アイドルやタレントのおっかけ」を選ぶ女性の割合が急増していることが見てとれるだろう。

「好き」に没頭できる SNS

なぜ、「おっかけを趣味とするひと」が若い女性の間で急増したのか。原因はいくつも考えられるが、ここで指摘したいのは SNS との関係である。SNS の普及が、趣味に関する情報の集めやすさに

つながっており、以前はごく一部の人しかおこなわなかった（あるいは、おこなうことができなかった）「趣味としての『おっかけ』」が広まったと考えるのだ。

テレビや新聞、雑誌などのマスメディアと比べて、インターネットを使えば自分の気になる情報をいつでも好きなだけ調べることができるのは周知のことだろう。なかでも、今の若者の情報収集の中心は SNS となっている。友人や知人はもちろん、自分が気になる情報を発信する人や公式サイトをフォローしていれば、ちょっとした空き時間にタイムラインをチェックし、自分が気にな

る情報をいくらでも入手できる。調べたいことがあるときも、ウェブサイトを検索するよりは、SNSでハッシュタグを使って検索する。そのほうが、出てくる情報が絞り込まれており、便利なのである。

「おっかけ」より一般的なのは「推し」という言葉だ。「推し」とは自分が好きで、他人にも薦めたい人やモノのことであり、その対象を応援することも意味している。アイドルファンが使い始めたと言われるが、今ではさまざまなジャンルで「*好き」の代わりに広く使われている。しかし、「推しメン」がユーキャンの新語・流行語大賞にノミネートされたのは2011年。実は、比較的新しい言葉である。では、なぜ「推し」は急速に広がり、「推し活」をする人が目立つようになったのだろう。

多くの人に好まれている人やモノはもちろん、マイナーな「推し」についての情報もSNSなら入手可能である。むしろ、マイナーであるからこそ、SNSを駆使して、情報を集めることが効果的だ。さらには、自ら感想を発信し、共有することで、同じ「推し」を応援する人と繋がり、一緒に応援することも可能である。主体的に参加する楽しみが「推し活」にはある（参加型文化については、ジェンキンス(2021)を参照）。

あなた個人が「沼」にハマったのは、「推し」が「尊い」からだだろう。SNSは関係ない気がしても当然だ。しかし、「推し」や「推し活」が広く流行するようになったことはSNSと切り離せない。自分の「好き」に没頭できる環境を提供してくれるのがSNSであるからだ。

気が合う相手とつながる SNS

一方、SNSの普及で人とのつながり方はどのように変わったのだろう。

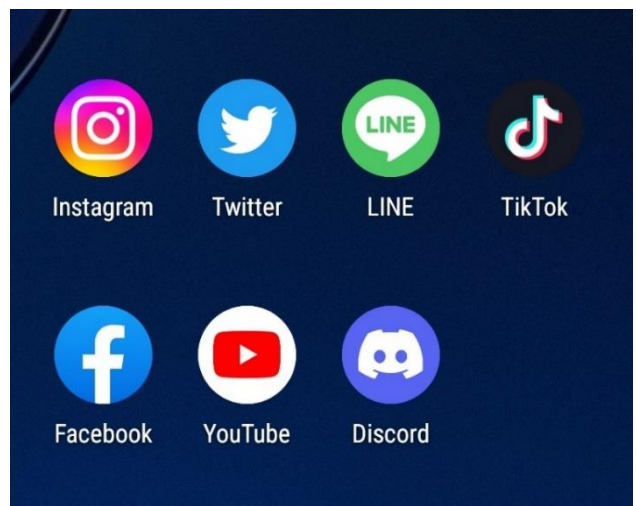
SNSでは直接会ったことがない人とつながることができる。先に示したグローバル若者研究会の調査でも、「直接会ったことがない人と、SNSで

やり取りをしたことがある」人は杉並区で55.5%、松山市で55.8%と半数を超えている（2020年）。

では、友人の数が増えているかということでもない。2005年から2020年にかけての「親友の人数」「仲のよい友人の人数」「知り合い程度の友人の人数」には変化が見られず、意識の上でも「友人の数は多いほどいい」を肯定する人の割合は、一貫して減少傾向にある（たとえば、杉並区2005年42.9%→2020年25.7%）。その一方で、増えているのは、「気の合う友人とだけつきあいたいと思う」（杉並区2005年69.5%→2020年83.0%）人であり、「一人であることが好きだ」（杉並区2005年70.2%→2020年81.9%）という人だ（詳しいデータは、辻・大倉・浅野・松田(2021)を参照のこと）。

すなわち、今日の若者の中で強まっているのは、友人関係を広げるよりは、気が合う人とだけつきあいたいという意識であり、一人であることを好む傾向ということになる。

実際、筆者が「遠征」をおこなう大学生を対象におこなったインタビュー調査でも、Twitterで趣味を同じくする人と親しくなる過程においては、年齢や性別が同じであることや同じ学生であることなど、プロフィールから判断できる情報に加え、ファンとしての「熱量」やツイート内容から読み取ることができる雰囲気などから、気が合いそうか判断するようすがうかがえた（松田, 2019）。



「好き」から広がる可能性

このように SNS が提供する情報環境や人間関係は同質的である。自分にとって心地よい情報だけを入手し、気の合う相手とだけつきあうことができるからだ。もちろん、因果関係は逆にも考えるべきだ。自分にとって心地よい情報だけを入手し、気の合う相手とだけつきあいたいと思う人が増えてきたからこそ、それを可能にするメディアである SNS が登場し、普及した。メディアと社会の関係性は一方向的な因果関係ではとらえがたい。

このような SNS が提供するメディア環境のデメリットはすでによく知られている。たとえば、フェイクニュースは SNS を通じ、仲間集団の中で「事実」として広がりがちだ。サイバーカスケードとは、インターネットで、同じ価値観を持つ人が集まり、議論を重ねる中で、極端な考え方が生まれがちであることを指す。

その一方で、「好き」だからこそその可能性は考えられないだろうか。

SNS を通じて親しくなるのは、たしかに気の合う相手であり、自分と似た人だ。しかし、学校やサークル、バイト先などでは出会う機会がなかった人であるはずだ。SNS は多様な出会いを提供してくれる。

「好き」だからこそ、自分で積極的に行動する。筆者がおこなった「遠征」調査では、「押し」に会うために、自分で交通手段や宿泊先を手配し、トラブル対応も得意になり、すっかり「自立」したと語る人がいた。「遠征」というきっかけがなければ「一生行かない」という場所に行き、「せっかくなので」と観光したことが、印象深い思い出になったという人もいた。行動すれば偶然の出会いがある。

能動的にメディアと関わることから生まれる可能性を意識し、今日のメディア環境を積極的に活かしていく。大学生に期待したいことの一つである。

<参考文献>

- ジェンキンス, ヘンリー, 2021, 『コンヴァージェンス・カルチャー：ファンとメディアがつくる参加型文化』晶文社。
- 松田美佐, 2019, 『「遠征」をめぐる人間関係：Twitter 上で親しくなる過程と社会的場面の切り分けを中心に』『中央大学社会科学研究所年報』23：215-232。
- 辻泉・大倉韻・浅野智彦・松田美佐, 2021, 「若者文化は 30 年間でどう変わったか 『遠隔＝社会、対人性、個人性』三領域の視点からの『計量的モノグラフ』（その 2）」『紀要 社会学・社会情報学』32：79-142。

<著者紹介>

松田美佐（まつだみさ）中央大学文学部社会情報学専攻教授・メディア／コミュニケーション論
主要業績：

Mizuko Ito, Daisuke Okabe, and Misa Matsuda (eds.), 2005, *Personal, Portable, Pedestrian: Mobile Phones in Japanese Life*. MIT Press.

松田美佐, 2014, 『うわさとは何か——ネットで変容する「最も古いメディア」』中公新書。

松田美佐, 2019, 『「遠征」のケーススタディ：移動を促す趣味・人間関係・スマートフォン』『紀要 社会学・社会情報学』29：21-39。

押し活も楽じゃない!?

—SNS は戦場だ—



商学部会計学科3年。
音楽、アニメ、スポーツ
とか色々好きだけど
「押し活」はやったこと
がない!

A

文学部国文学専攻3年。
古典が好きなので、SNS
で大学院生や国語教員
の方をフォローして、眺
めるのが楽しみ。

I

文学部ドイツ語文学文
化専攻3年。趣味はボ
カロや UTAU、歌って
みたを聴くことです。
最近ライブに行ったの
で、特に熱い!

K

文学部フランス語文学
文化専攻3年。中央大
学の附属高校から進学
しました!趣味はアイド
ルタレントの「押し活」と
読書です。

T

#大学生の SNS 事情

K: 皆さん SNS はやっていますか?

A: 大学用のアカウントはあります。

T: じゃあ、アカウントは一つですか?

I: 私は一つですね。

T: 私はオタク用のアカウント、大学用、高
校用とあります。

K: 私も大学用、オタク用、サークル運営用
の三つがあります。

A: そもそも「おっかけ」って少し古いかも。

I: 「おっかけ」じゃなくて「押し活」の方
がよく聞きます。

K: YouTube が主流になって、ライブに行か
ないと会えないみたいなのはなくなったよね。

I: じゃあみんな「おっかけ」はやっていな
い?

T: 「おっかけ」はやっていないけれど、
「押し」はいます。それこそ推しのグループ
が公式 Instagram を開設して、そこでライブ
配信をするので、現場に行くことにこだわる
人は減ったのかなと思う。

A: 現場に行っているファンがコアだから偉
いみたいな風潮があるのかなと思っていたの
ですが…。今は違うのかな。

#押し活は SNS なしでは 始まらない?

I: SNS がなくても押し活はしていたと思う?

T: 私は始まっていなかった気がします。友
達に勧めるときも「この YouTube 見てみて」
から広がっていく気もするので。誰でも簡単
に無料で見られる状態になったからこそ、広
がっていくのが早くなったのかな。

K: 私も押し活はやっていないかな。界限に
よると思うんですけど、私は YouTube とかニ
コニコ動画っていう動画投稿サイトで動画を
上げている人を好きになったので、そもそも
その媒体がないとその人のことを知らないし。

I: SNS でライブに行った時の画像を上げてい
る人もいますよね。

K: ライブのチケットを何枚も積み重ねて写
真に撮って、それを SNS にあげる人も見たこ
とがあります。ライブに行っていることを
SNS で見せるまでが押し活になっている気が
する。

A: その投稿は誰に対して見せているんです
か?

K：同じ界隈のオタクに対する自慢なのかなと受け取ることもあります。

T：結局「押し活」とか「おっかけ」には、その界隈だけで共有されている価値観があって、その中ではその価値観が大事になっているのかなって。

K：たしかに SNS で繋がっている人たちは同じような価値観を持っているイメージがあります。ある意味、外部と内部の価値観の違いが結構ありそうだなという気がします。

I：先ほどの自慢の話を知ると、SNS を通じて同じ趣味の人と共同体を作るといふよりかは、何かコンフリクトが生じるというか…。必ずしも幸せな共同体ができるわけではない気がします。

A：押し活の成果を可視化できるようになったって事ですかね。

#そもそも「押し活」って？

A：押し活って言葉は SNS とリンクしている言葉なのかな。

T：押し活の具体的な内容は決まっていなくて、自分が「これが押し活だ」と思ったものが押し活になる気がします。

A：例えば SNS で発信している人はもちろん押し活をしていると思うけど、その情報を見ているだけの人も押し活をしていることになるんですか？

T：推しのコンテンツを何かしらのメディアで享受してれば、押し活にはなるのかな。その人の熱量によって、「そんなの押し活じゃないよ」といふ人もいるとは思いますが。

K：私は「押し活」より「押し事」といふ言葉の方が良く聞きます。「お仕事」を「押し」に変えて「押し事」といふ。「今日も押し事頑張ります」といふ感じでライブに行くとか。

I：義務感みたいなものがあるんですか？

K：そうなのかな。今日は押し活を頑張るぞ

って意味だと思ふけれど。

T：義務的になってしまうのは周りで見ている人がいるからだと思ふます。周りにいる気の合う人から「ライブに行こう」といふ誘われたら、多少熱が冷めているときでも行っちゃうんですね。SNS でつながるからこそ、やめられなくなって、余計に注ぎ込んでしまうのかなと思ふます。

I：わかっちゃいますもんね、この人最近発信していないから冷めてきたのかなって。

T：そう思われたいからまた行く感じがすかね…。



ライブ会場としてよく使用される Zepp DiverCity(記者撮影)

#多種多様な「押し活」

K：A さんは何か推しているものとかありますか？

A：自分は昔からあまり推しっていうのはないですね。自分が好きなものは何でも吸収しちゃう、珍しいタイプなのかもしれない。

K：じゃあ SNS とかですごく熱狂的に推している人を見てどう思ふます？

A：何が目的なのかなって。ただ好きなだけじゃなくて、コンフリクト的なことを楽しんだり、時には暴走したりする人もいるから。押しに認知されたいとか？

T：いや、そっちよりも周りの目を気にしている人が多い気がします。

I：話を聞いていると、押し活をしている人同士で監視し合っているような印象を受けます。

A：他のファンに対する優越感が欲しいのかな。推しの幸せを願っているはずなのに、推しに迷惑をかけるようなことをする人もいるから、それは本当に相手のことを考えているのかなって思います。それでも熱量をもって楽しめているからいいのかもしれないけれど。

K：Iさんは推し活をどう感じますか？

I：私は推しという存在はいないんですけど、古文が好きなので、古文好きの人が発信している SNS をよく見えています。このつながりは年齢層が高いのもあって和やかで、「この歌論書で読書会やるから来てください」みたいな感じなんです。同じ「好き」同士が集まる世界でもだいぶ雰囲気の違いがあるなと思います。

K：コミュニティによって全然違うんですね。聞いていて新鮮でおもしろい！

#イベント化されるフェイク ニュース…!?

A：論文の最後に出てきたフェイクニュース

って政治系ならあるけれど、推し活とフェイクニュースってあまり関係ないのかなと思っていました。推し活をしていてフェイクニュースって見たことありますか？

T：私はよく見かけます。

K：芸能系だとフェイクニュースというより、スクープを撮られて、出回っているイメージがある。

A：その手のフェイクニュースだと社会的影響はあまりなくて、その界限にだけダメージがいく印象ですが、フェイクニュースに流されるというのはどんな心理なのでしょうかね。

I：フェイクニュースを信じる人と信じない人とで、一喜一憂しあうとか…？そういった楽しみが推し活をしている人たちの中であるのかな。

A：苦しいはずのことが楽しくなっている、ということ？

T：そんな気がします。フェイクニュースで盛り上がっているのを見て楽しんでいる人もいるだろうし。

A：イベント化しているってことかな。

T：イベント化しちゃっていると思います。

「SNS は多様な出会いを提供してくれる。」松田美佐教授の言葉にある通り、私たち若者にとって SNS は情報収集だけでなく人間関係を構築する上でも欠かせないツールである。「#〇〇好きと繋がりたい」というハッシュタグを使えば、同じ趣味をもつ人と気軽に繋がることができる。趣味がどんなにマイナーでも SNS 上にはたくさんの仲間がいる。SNS は物理的な制約を超えて、あなたと同じ関心・価値観を持つ人々を繋げてくれる優れものなのである。

だが SNS も万能ではない。好きな情報を好きなだけ調べることには長けているが、あなたに関心を持たない情報はあらかじめ排除されている。自分の好きなことについて、同じように好きな人と交流できる場は楽しいだろう。だがこうした場には他の意見や情報が入ってくる余地はない。また SNS 上での人間関係のトラブルも深刻な問題だ。いじめ、詐欺、性犯罪など SNS を介した事件はあとを絶たない。プロフィールやアイコンは自由に制作できる反面、悪意をもって他人に成りすますこともできてしまう。目に見える情報は真実だけではないことを常に意識する必要がある。

この記事を読んで、自分の SNS 利用をぜひ振り返ってみてほしい。SNS には多くの利点がある一方で、情報の真偽を定め、どのように使うのかは我々に委ねられている。あまりに身近で気づきにくいのが、SNS を通じた環境づくりも環境問題の一つなのである。

あとがき

「環境と人間」という統一テーマのもと、今年度（2022）は、受講学生が三つのグループに分かれて、それぞれ主体的に問題を立て、異なる手法からテーマへアプローチした。授業を担当するにあたって最も意識したことは、この授業を、大学の「授業」ではなく、企業などで行われる一つの「プロジェクト」として学生諸氏に意識してもらうことであった。ミッション・ステイトメントの作成から始まり、デジタルマガジンの納期確認、そこから逆算した各作業のリスケジュール、またSTP分析により製作物であるデジタルマガジンの客観的な位置づけ等を行った。そして授業の最大の狙いは、チームで一つのプロジェクトを遂行していく大変さ、またその大変さを一気に忘れさせてくれるような遂行した時の感動である。それを感じていただければ教師冥利に尽きる。（大川 真）

大学生が同年代の若者に贈るデジタルマガジン『環と和』が完成した。自然、教育、メディアなどの身近な〈環境〉が抱える課題を発見し、読者と共に答えを模索することで、人間と環境、自己と他者の〈調和〉を目指す一助になればという思いが込められている。奇しくも2022年は新型コロナウイルス感染症の長引く影響とロシアによるウクライナ侵攻で幕を開け、隔離、国境封鎖、分断、対立などの言葉が紙面に並んだが、先の第27回国連気候変動枠組み条約締約国会議では途上国支援の拡充について合意が成立し、各国が協調して温暖化問題に取り組む姿勢も示された。ままたらぬ世の中だからこそ、若者には本誌が掲げる理想と批評精神を持ち続けてほしい。（木村 明日香）

「環境」は、近代の学問や科学が暗黙の前提としてきた主体客体理論を乗り越える力を持っている。わたしたちはこの世界について、まさしくこの世界の中で考え感じるのであって、だれもこの世界の外から、自分だけが不動の中心性をもって世界を眺めることなどできない。21世紀の学問や科学の最先端の動向は、人間が世界内存在であることへの実感や、知覚や認識があくまでも自己準拠的で自己再帰的な構成物であることへの真摯な自覚に基づこうとするとところに見出せる。今回、デジタルマガジンの作成にあたった受講学生たちが、「自分事として環境を捉える」視点を一貫して持っていたことに、次世代を担う若者たちの力強さを感じるのである。（首藤 明和）

仏教の教えに「依正不二」という言葉がある。依報（生を営む主体である衆生）と正報（衆生が生を営むための依り所となる環境）が、一見、二つの別のものであるけれども、実は分かちがたく関連しているという意味である。デジタルマガジン『和と環—環境と人間の関わりを自分事として考える—』は、まさに「依正不二」の摂理をこの時代を生きる青年らしい発想と行動で具現化した結実である。自分と自分の周りを取り巻く環境は別のものであるのではなく一体であるという時代普遍のメッセージを同世代の青年たちに届けようと、対話と創意工夫を重ねてきた製作者の中大生のみなさんに心から拍手喝采を送りたい。（尹 智鉉）

出版部門のメンバー一覧（順不同、学生・教職員は敬称略）

学生

- 安齋 諒太郎（商学部会計学科）
- 石原 雅（文学部国文学専攻）
- 垣内 咲南（文学部ドイツ語文学文化専攻）
- 河村 帆乃（文学部学びのパスポートプログラム）
- 桑田 笑歩（文学部国文学専攻）
- 高田 雪光（文学部ドイツ語文学文化専攻）
- 高松 映莉華（文学部フランス語文学文化専攻）
- 鳥海 空雅（文学部日本史学専攻）
- 朴 泰佑（文学部学びのパスポートプログラム）
- 平田 尚輝（総合政策学部政策科学科）
- 和佐 まりあ（文学部国文学専攻）

ゲスト講師

- 清水 修さま（Academic Groove Movement）

担当職員

- 齋藤 優里花（文学部事務室職員）
- 坂田 範夫（文学部事務長）

担当教員

- 大川 真（文学部教授・哲学専攻）
- 木村 明日香（文学部准教授・英語文学文化専攻専攻）
- 首藤 明和（文学部教授・社会学専攻）
- 尹 智鉉（文学部准教授・学びのパスポートプログラム）